

<資料紹介>高度成長期における技術者養成の オーラルヒストリー：立川勇氏(元工業高校 教諭)の仕事

妹尾, 渉 / SENOH, Wataru / UMEZAKI, Osamu / 梅崎, 修

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Lifelong Learning and Career Studies / 法政大
学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

405

(終了ページ / End Page)

437

(発行年 / Year)

2008-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007336>

〈資料紹介〉

高度成長期における技術者養成のオーラルヒストリー —立川勇氏（元工業高校教諭）の仕事—

平成国際大学法学部 専任講師 妹尾 渉
法政大学キャリアデザイン学部 准教授 梅崎 修

1 調査の目的

日本の高度経済成長期（1955～1970年代前半にかけての約20年間）は、経済規模の急速な拡大と同時に、その拡大を支えるためのマンパワーの養成、とりわけ、理工系技術者および技能者の養成が必要とされた時代であった。この時期、日本では国内総生産（GDP）が実に18倍（名目値）、伸び率では平均して年率8%（実質値）を記録し、その裏で産業構造は農林業を中心とする第一次産業から製造業を中心とする第二次産業へと急速に舵を取る事となった。この結果、国内の産業界からは理工系技術者とそれを支える技能者の慢性的な人手不足の声が上がる事となり、再三にわたる産業界の要請を受け、政府は、理工系技術者の養成を「経済自立五カ年計画」（1955年）、「新長期経済計画」（1957年）、「国民所得倍増計画」（1960年）といった長期の経済計画の中に積極的に取り込んでいく事となる。これにより、その後の工業高校の拡充を始めとする、理工系大学、高等工業専門学校の新設により、理工系技術者の人材供給の量的拡大が行われたのである。

本稿の目的は、高度経済成長期以降の日本の工業高校の進路・就職指導の変遷を追うことで、当時の中級技術者および技能者の養成がどのようになされ、その後、労働市場へと吸収されていったのかをオーラルヒストリーという手法を通して明らかにすることにある。

2 資料的価値

このオーラルヒストリーの語り手である立川勇氏は、長年に渡り、千葉県立

千葉工業高等学校（千葉市）の教諭を勤められてきた。なかでも、1960年代後半のまさに工業高校の量的拡大政策が取られた時期において、3年生の担任および進路指導部での貴重な経験を積まれている。オーラルヒストリーの利点は、数値データの分析だけでは見落とされてしまった、当時の個人の果たした役割や当事者たちの当初の意図や予測を拾い出せることにある。文書資料や統計資料で把握できる結果の記述と同時に、その結果に至るまでの過程をインタビュー調査によって追っていくことは非常に重要であり、それにより、これまで埋もれていた歴史事実の発見とともに、歴史研究の新しい方向性を示せるものとする。今回の氏の証言を通じて、以下の2つの点が明らかになった。

第一に、高度経済成長期以降から現在に至るまで、千葉工業高校の卒業生は、その進学層の変化にも関わらず、就職に関しては比較的恵まれているということである。そのことは、この間、幾度かの景気循環の波があるなかで、学校側がまったく企業訪問等の活動を行う必要がなかったという証言に端的に表れている。これは近年の一般的な高卒労働市場の環境の厳しさから考えると、驚くべき事実である。第二に、進路指導の上において、成績上位であることが必ずしも威信の高い企業群への就職の切符とならない、ということである。むしろ、企業側は成績優秀者よりも、その他の能力（たとえば「元氣な」人物、等）を重視していることが伺える。また同時に、労働市場とのマッチングの際に、教員の側もある種のスクリーニング（選別）として非常に重要な役割を果たしていることもわかる。一方で、この事実は職業訓練としての工業高校の教育内容の有用性についても再考を促す結果である。

3 証言記録

〈千葉工業高校への就職〉

梅崎 千葉工業高校さんにお伺いして、データとか学校の歴史に関してはだいたい私たちも概略をつかめたんですけども、実際の進路指導がどのように行なわれていたのかとか、生徒たちの意識の持ち方とか、もしくは相手側の企業のアプローチの仕方とか、そういう歴史の変遷を質的に理解するのは難しかったです。そこで、立川先生に千葉工業高校の話をお伺いしたわけです。

事前資料として、立川さんの略歴表をいただいておりますので、これに沿うような形で、時代ごとの流れを順番にお聞きしていければいいかなと思っております。はじめに、千葉工業高校のことを伺おうかなと思ったんですけども、その前に松尾高校に勤められていたのですね。

立川 初年度、1年目ですね。

梅崎 立川先生が教職をとられて、高校に初めて就職されたのがこの松尾高校ということになるんですか。

立川 そうですね。私は、田町にあります東京工業大学の附属の、昔、臨時措置法でできました工業教員養成所という、いわゆる旧帝国大学に主としてできた東工大の教員養成所を（昭和）41年3月に生まれて、免許は工業しかありませんけれども、その工業の口がなかったということですね。工業高校には勤め先がなかったと。同期で何人かいますけれどもね。そして、免許外で数学を。この松尾高校という、女子高校ですけども、そこで届けを出して数学を教えていたということですね。

梅崎 普通科高校で数学を教えられたわけですね。

立川 ええ。そして、ちょうど千葉工業高校が津田沼の、いまの千葉工業大学があると思いますけれども、JR津田沼のその反対側に、ヨーカドーですかね。スーパーがありますけれども、あの近くに千葉工業高校があったんですね。もともと昭和11年に千葉市内で千葉工業高校が発足して、また千葉に戻ろうという気運があって、ちょうどいまの蘇我の高台に学校が移転したと。そういうところで、教員の移動がけっこうありましたので、私の行く場所があったというか。そのときの松尾の校長が、「おまえは1年だけだよ」ということで、いわゆる担任も副担任も持たせられないで、「1年でおまえはもう工業に行くんだ」と。そこに入って、それ以来、千葉工業に47歳まで、25年間いたと。いまではもう、工業の場合は特別ですけども、10年以上いるということはあまりありませんけれども、25年いたということですね。

梅崎 そうしますと、千葉工業高校に入られたときは、何の科目を教えられることになったんですか。

立川 私は電気工学を専攻しましたので、工業科のなかの電気科ですね。

梅崎 新人という形になるわけですね。初めのときは、基本的に新人教員ですから、授業という仕事メインになると思うんですけども、当時は、ご記憶に残っている範囲でいいんですけども、立川さんはどんなお仕事をされたのですか。逆に戸惑われた経験はありますか。

立川 やっぱ工業の専門ということもありましたので、ましてや松尾高校は女子校でしたから、ちょっと戸惑った面もありましたけれども、千葉工業というとほとんど9割……このときはまだ女子が多かったですけども、9割5分ぐらいは男子ですからね。まあ、こちらとしてはすぐ溶け込みやすい形ですね。担任は、1年目は持たせられないから、1年経過して24歳のときに初めて担任を持ったので、このときはあるクラスの副担任というふうになりました。授業は、そのクラスをもちろん持つし、まだ新人だということで1年と2年の学年を持ったと思いますけれども。専門科目の、いわゆる座学では、退職された先生の持っていた科目と、実習を持ちました。

梅崎 一般的に学校の先生は、新任の方は3年生を持ってないんですね。

立川 だいたいそうですね。私が24歳で1年を持って、ずっと持ち上がりですよ。24、25、26で、3年間持って卒業させるということで。だから、持ち上がりで。要するに、電気科が2クラスありまして……そのときは3クラスでしたけれども、ずっと同じクラスを3年間持つという形でありました。

梅崎 1年生が2年生になって、そのまま。

立川 クラス替えはぜんぜんしないですね。

梅崎 じゃあ、3年間ずっと同じ先生が担任になるということですか。

立川 そうです。

《当時の進路指導体制》

梅崎 ちょうど3年生のときになると、教えること以外に、自分のクラスの就職といえましょうか、そういうことが仕事にも入ってくるわけですね。

立川 そうですね。進路指導部の部屋がありますので、3年になるとその進路指導室に。1年、2年でも、ロングホームルームがあります。

梅崎 私なんかも大学で学生を教えていると、進路指導といっても高校とは違

いますが、スケジュールがあります。この当時、まだ1960年代で景気のいいころだと思えるんですけども、どんなスケジュールになっているんでしょうか。

立川 いまは、1年からずっと3年までやるのがベストでしょうけれども、やっぱり集中するのは3年になってからで、だいたい3年の4月当初のロングホームルームのときに、いわゆる希望調査をします。そこで、就職あるいは進学というのに何人ぐらい希望しているかということで、ある程度それを学年ごとにまとめて、進路指導部に提出して、実際の人数を把握すると。そういうことでやって、そして週に1回ロングホームルームの時間がありますから、そういうときに進路指導を中心とした、いわゆる進学・就職も含めてですね。その当時も、進学と就職は一緒じゃなくて、ある程度分けていましたね。進路全体はあれでしょうけれども、就職の話になると、また進学希望者はちょっと除いてですね。進学の場合だと、その当時からそうですけども、推薦入学という形でそういう形の説明会を、4、5、6月。で、だいたい6月の下旬あたりから職安関係のいろんな求人受付というのもありましたので。そのころは、いつでも職安の求人が受付開始か……確か、6月下旬。その当時もそうかなあ。

そういう形でやって、あとはもう7月、8月、夏休み中も当番を決めて進路室に詰めたり、クラスは8クラスで、プラス学年主任だから、9人ですね。プラス進路指導が、3年の担任もいるかもしれませんが5人ぐらいで、14、5人ぐらいがいわゆる就職・進学にあたっていて。そのなかには進路指導部長と副部長がいますけれども、それ以外に3人。で、合わせて5人ぐらい専任の人がいて、その人がだいたいずっと。

我々担任も、たとえば授業の空いているときを見計らって、水曜日の3時間目がこっちがいいということになればその時間に、授業時間の50分のところを進路指導室にいて来客の対応をしますとか。六月頃から会社の方が見えるので、今年の状況はどうか、求人はどうかとか、こちらからは生徒の就職希望はどの位いるとかの情報交換をしたりすることが多くなります。求人票が職安からOKになって、また7月、8月にどんどん来ます。景気がいいときには、もう本当にひっきりなしにお客が見えるわけですね。

今度は、7月20日の終業式が終わって、もう生徒がいなくなるというか、授業がなくなるともうだいたいずっと、我々担任も含めて8月31日まで当番を決めて、会社の人に対応するというので。

梅崎 そうしますと、生徒から希望を出させて、ホームルームの時間等で、一人ひとり面接するとか。

立川 そうですね、担任がね。

梅崎 「いまの業種はこういうものなんだよ」という業界紹介の授業もなさったのですか。

立川 そういう提供は、進路指導の職員が学年に提供してくれたり。それから、就職か進学かなんてというのは、ある意味では入学して以来、担任はだいたい学期ごとにやったり、それから成績が出る度に、1学期、2学期にだいたい保護者面談をやって、それで就職か進学か。それは徐々に決めて、最終的に3年の1学期の4月あたりに希望調査をとるという形ではやっていますからね。

梅崎 当然、進学のほうは、推薦が多いというお話でしたから、授業成績がいい子じゃないと進学できないわけですね。

立川 これは、いろいろな条件がありますよね。成績がよくてもいろいろな家庭の事情で、たとえばクラスで40人いますと、そのうちの上位5人ぐらいの者のなかでも、就職希望ももちろんいるし。それは、家庭のいろんな経済的な面もあるのかもしれませんがね。「兄貴が行ったから弟にも行かせたい」とか、親のいろいろな希望があってですから、必ずしも上位の者がということにはなかったですね。ただ、職種が技能職・技術職と、その中間的な生産技術職みたいなのがあって、本当に成績が上位で就職希望の者は、それは本当の技術職を希望するんですね。成績のいい生徒はですね。

梅崎 でも、成績があまりよくなければ、推薦の点数をクリアできなくなってしまうと思うんですけども。

立川 そうですね。でも、この当時も、極端にいうといろんな大学がありまして、もちろん六大学というのはとてもハードルが高いわけですがけれども、その他の大学では成績が中以下でも、いわゆる5段階に直して評定平均値でやると、とってくれるところもありましたからね。いわゆるCでも、とい

うようなところはありましたですね。ただ、その後の卒業後が心配だと。大学を出てもどうかということ、我々も心配ですよ。ただ、親が「なんとか進学させたい。自分ができなかった希望を叶えさせたい」という、そういういろいろな条件がありますからね。必ずしも、「おまえは無理だ」とは言えないし。

それから、いわゆる進学の評定平均値でA、B、Cとかありますけれども、Aの生徒もいるしBもいるしCもいるということですね。いまや東海大学はかなりレベルが高くなっているんですけども、私が24、25、26歳に担任を1回目持ったあと、「おまえはまだ若いから、もう1回、連続して持て」ということで、また27、28、29歳と6年間、担任を持ったんですよ。その後、ちょっとの間休めということだから、普通は1年休むんですけども、「おまえは2年間休め」ということで、30、31は休んで、その後、今度は最後の3年間を、34歳まで担任を持ったんですがね。そういう形で持ったんですけども。

梅崎 ある程度は、東海大学等で卒をもらって。

立川 いまは聞くと、もう東海大学は推薦ができないと。あるいは東京電機大学なんていうのも、もうやめちゃったと。これからはでも、全員が大学に入れるような時代になりますから、今後はどうなるかわかりませんが、その当時は推薦やっていた今はかなり入れなくなった大学とか、いろいろありますね。

梅崎 だいたい最初の頃、1クラスのなかで進学者というのはどのくらいのパーセンテージになるのでしょうか。

立川 平成17年は、逆転して進学のほうが6割ですけども、この当時は7割ぐらいは……。むしろ要覧のほうがはっきりしてるとは思います。

梅崎 7割ぐらいが就職ですね。

立川 そうですね。それがだんだん、7、6となって、いまはもう5割を切っちゃって、進学が逆に多くなっちゃいましたけれども。

梅崎 進学といっても、専門学校が多いんですか。

立川 そうですね。専門学校を含めてですけどもね。ただこれは、この前も申し上げたように、九州地区では逆にいえば大学が多いとかね。首都圏は

専門学校が多いとか、そういう形ではあるかもしれませんがね。

《求人会社と就職希望生徒のマッチング》

梅崎 そうしますと、だいたい七割ぐらいの人たちは就職をすると思うんですけども、当時は景気がいいので、どこかは行けるだろうというか、就職率は非常に高かったのですね。この前データを見せていただいたので、いまでも高いなと思ったんですが。先ほどおっしゃられたように、ひっきりなしに会社が学校のほうに訪問して来たと思うのです。

立川 はい、ありますね。

梅崎 で、また新規に入ってくる会社がある。

立川 はい。

梅崎 ひとつのクラスに対してどのくらいの会社に来ていたものなんでしょうか。

立川 いまの基準が1・数倍ですけれども、昔は、たとえば100人に対して1000以上はありましたですね。2000はいかないと思いますけど、とにかくいちばんいいときはね。いわゆる贅沢を言わなければ、10数倍。いまは本当に、100に対して150社とか、200はなかなかね。外食産業とか、そういうのを加えれば、会社数は2倍ぐらいにはなるでしょうけどね。実際に工業の就職先で適当なところは、そういうところを除いちゃいますので、そうすると1.4~5倍。工業だとね。これは、他の専門高校よりももちろんいいわけですけれども。

選ぶ場合には、結局いろんな基準があって、大企業を選ぶか小企業を選ぶかというようなこと、それはその生徒の性格で、ある程度基準が決まりますよね。おとなしい生徒で成績がいいのは、極端にいうとなかなか探ってくれるところは少ないとかね。ただ、研究職とか技術的な仕事だと、おとなしくて成績がいいのを探ってくれますけどね。たとえば東電とか、いまはもうNTTはなくなっちゃいましたけれども、川鉄だとか、蘇我の近くにある会社、あるいは工業地帯にある出光興産だとか、大日本インキだとか、古河電工だとか、要するにそういうところがずらーっとありましたから、そういうところは技能職か技術職かという違いでもありますし。と

ころが、千葉工業からはいつもいい生徒を、たとえば成績のいい、元気のいいというのが条件で技術職になる生徒もいるし、同じ会社でも技能職で採る生徒もいますけどね。

梅崎 それは、採用の段階で明確に分かれているわけですか。

立川 ある程度、求人票で。職種で、2枚来たりするケースがありますね。

梅崎 生徒側からすると、中小よりも大企業のほうがお給料もいいと考えるわけですね。大企業志望の人が多いと思うんです。それから、技能職と技術職だったら、技術職に行きたいというほうがほとんどなわけですね。

立川 ただ、技術というと、自分の学校での成績とか、そういうことで躊躇する生徒もいますよね。たとえば、成績は40人のなかで20番ぐらいの生徒だと、まず私なんかは、「ちょっと技術は無理だ」とかね。トヨタとか日産とかいうところは、生産関係職という技術職と技能職の中間的な職種で、そういうところは20番ぐらいの生徒でいいでしょうけれども、1桁台、10番以内の生徒は、たとえば「技術職を狙ったらどうか」ということは、よくアドバイスはしましたけれども。

梅崎 でも、大学でも理系では、研究室というところがあるわけです。フリーに就職活動をするわけではなくて、それとは別に研究室で、成績優秀な子を「じゃあ、君はここへ行ったらどうだ」と。先生のほうがその子の専門性とか能力とかを見て、ある程度割り振っていくというのがあると思うんですけれども。

立川 はい、そういうのもありますね。ただそれは、求人票はとくに出不さないけれども、学校へ訪問したときに、「じつは、こういう研究所の分析とかをやるのが欲しいんだ」と。昔は機械科、電気科、それから工業化学科という科がありましたけれども、たとえば工業化学科あたりの生徒ですと、工業地帯の研究的なところに欲しいというね。とくに、女子なんかはけっこう成績がいい生徒が多かったですから、そういうところで特別に欲しいということで、いわゆる直接こっちに話をきて、改めてまたそのための求人票をつくって、職種の欄に。一本釣りじゃないですけども、そういう形がありましたよ。市川にある——いまでもあるのかな、住友鉱山中央研究所なんていうところは、毎年そういう、いい成績の女子生徒を採っ

てくれるとかね。そういうケースはありましたよね。

梅崎 学生も希望を出しているわけです。先生から「この会社はいいよ」ということならば、「何々先輩も行ってるし」ということになると思うんです。でも、仮にそこで相手側が1人紹介してくれとって、高校側が紹介したとしても、それですぐ決まるわけではなくて、面接はあるわけですね。

立川 もちろんやりますね。

梅崎 でも、だいたい通るものなんですか。

立川 そういう場合にはね。だからこちらも、例年行ってる先輩を知ってる職員がおりますので、「これと比べてどうか」という比較をしながら、「これだったら大丈夫じゃないか」とかね。そういう形で送るケースですから、だいたいパスしています。そういう信頼関係が、学校と企業の間にはある程度、昔からずっとありますからね。ただ、昭和42年頃、私が最初に24歳のときに持ったクラスの生徒は、いまの千葉県でいうと県船という進学校があるし、千葉東というのがありますけれども、そこらへんにも入れた生徒がこのときは来ていたんですよ。

ですから、それ以前の昭和30年代は、いわゆる県立千葉とか、そういう進学校と千葉商業、千葉工業というのは、ほぼ同じぐらいでね。親が戦争で亡くなったから、仕方なく工業に来たとか。で、また進学しなおしたとかね。そういうケースがありましたけれども、私が24歳のころから、3回担任を持ちましたけれども、だんだん年が経つにつれて景気がよくなりまして、家庭が豊かになって、みんな普通校に行かせるものですから、相対的に工業に入ってくる生徒は落ちてきたと。ただ、40人もいるといろんな生徒がおりまして、非常に能力的にもいいなというのが必ずいますからね。そういう意味では、そういう会社に、押し込むというとあれだけれども、欲しいというところに行かせることがだいたいできましたけどね。

梅崎 会社側からの求人票と、高校側の「君、ここを受けなさい。受ければだいたい大丈夫だよ」というマッチングがあると思うんです。さっきの1クラスの就職を希望した7割のなかで、どのぐらいそのルートで決まってくるのでしょうか。逆に、「自由に受けます」という学生は、どれぐらいいるのかなと思うのですが。

立川 私も去年、普通高校で進路にいましたけれども、いまの生徒はなかなか扱いが難しいかもしれないけれども、この当時の、まして工業に来る生徒というのは、ある意味では非常に従順というとはかみたいですけれども、そういう意味ではきちっと物を作ったりする生徒というのは、比較的素直な面もあるし、ある意味ではこっち側に頼ってくる面がありますので。逆にいえば、こっちが変な会社に生徒を向けてもいけないし、たとえば、いくら企業の方が来ても、出ないのは出ないしね。

そのへんが辛いところがありますけれども、やっぱりそれは生徒のためを思ってやるとなると、だいたい生徒はこっちが過去のいろんな経過を見て、「ここがいちばんいいんじゃないか」と。とくに成績と、その人の、たとえば運動部の部活をやった点はプラスになりますし、それから成績のいいのもある程度プラスになると。性格が明るくて元気なのはさらにプラスになるし。逆にいえば、成績がよくて運動部もやらない、おとなしいというのは、ちょっと減点されるような会社で、それにふさわしい会社を探さないと落ちちゃうんですね。

たとえば東京電力というのは、けっこういまでも親も行かせたがるところですし、どの県でもみんなそうですけれども、ここは成績がトップクラスでも、おとなしい生徒は逆に落とされちゃうと。私なんか、進路指導部長をやったときには、要するにああいうところは頭を使うんじゃないと。体を使う仕事だというふうなね。極端にいうと、下請けの関電工ですか。当然、大本ですから下請けはいくつもあるし、そういうところにある程度指示をしなければいけないわけですね。そういう意味では、少々成績は落ちても、運動系の部活をやったとか、元気な者でない。そういう、いろんなことを頭に入れながらやっていますよ。

だから、私のやった頃は、ずっとその後82年、83年ごろは、だいたいコツはつかめたから、ある程度うまく収まるという感じですね。ただ、その場合も親の意向を踏まえながら、大企業にするか中小企業にするか、技術職にするか技能職にするか、それから県外に行ってもいいのか県内なのかとか。寮に入ってもいいのか、自宅から通ったほうがいいのかとか。そういういろんなものを確認しながら、じゃあここはだめだ、ここはいいと。

そういう形ではやっていましたですね。

梅崎 これは大変な労力ですね。

立川 だから、ある程度経験が必要ですね。最初の担任なんていうと、まったくそういうのはありませんし。校務分掌というのがありますがけれども、私はいちばん最初は、教務という関係をやってたんですよ。指導要録の閲覧だとか教科書係とか、そういうのをずっと30歳ごろまでやって。昔は、進路指導部と教務部と両方の部をやってたんですよ。ところがそのときに教頭に、「どちらかにしたらどうか」と言われたものですから。

　　といって教務だと、電気科という職員室があるわけですがけれども、そこと離れて今度は教務室というのがあるんですね。だいたい教頭がいるところにあるんです。そこに席を移さないといけないと。教務で部長、副部長になっていくとね。それだと、どうも電気科のほうもちょっとということで、じゃあ進路をやるかということ、そして32歳のときに進路を、教務部とはまったく離れてやっただけです。ですから、それ以前はずっと進路におおさって、2回ほど担任を持ちましたけれども。でも、卒業生を出すたびにだいたい頭には入ってきますしね。会社の人と接客をして、ある程度情報も入ってくるし。

梅崎 逆に、こちらから会社のほうに行くことは当時はなかったんですか。

立川 なかったですね。はっきり言えば、そういう……

梅崎 景気がよかった（笑）。

立川 ただ、工業ですと、いわゆる工場見学とかいうふうにして、昔は1学期と2学期にありましたよ。実際の製造現場に行くとかね。それは別に、こっちは会社の様子を見て、卒業生が来たりして、卒業生が体験談を後輩に対して話すわけですね。そうすると、職場の雰囲気なんかが少しつかめると。ただ、それは年に2社ですから。それを毎年変えるにしても、「大変だな」とか、「こういうのは環境がいいな」とか、「いい場所にあるな」とか、そういうのは把握できますからね。「うちの生徒をとってくれ」というふうにしてお願いに行ったことは、私がやってる間は一度もありません。

梅崎 当初、景気がいいときはわかるんですけども、その後、80年代に入っ

でも、基本的にはこちらから企業訪問はやっていなかったのですか。

立川 なかったですね。ただ、これは工業高校だからだと思いますね。これが商業——商業は女子が多いですから、農業、普通科は、私も去年普通科にいましたけれども、とにかく訪問しないと採ってもらえないと訪問しても求人票も来なかった。工業の場合は、はっきりいってなかったですね。求人には不自由しなかったと。でも、全国的にみると、北海道とか沖縄なんかは逆にいえば、会社の求人が少ないから開拓しなきゃいけないとかね。そういうのがあるようですけども、首都圏はまずないんじゃないですかね。県内はもとより、東京からも求人がたくさん来ますし。私がやっていたときにはなかったですね。

あと、80年代の後半なんかは、88年の学年主任のときには、昔やったことがありますから、ずっと進路に入りっぱなしでやっておりまして、その翌年のときには進路指導部長になりながら、千葉県の事務局をやったので。だから、88年、89年は、ほとんど進路指導にはいましたけれども、訪問したことは一度もなかったですね。

梅崎 他の若手の先生でもそうなんですか。

立川 そういうことを、必要に迫られたことはなかったですね。いわゆる、手土産を持っていくというような訪問は、お願いしに行くということにはなかったですね。

梅崎 普通科高校と比べると、工業高校の場合は専門性がはっきりしていますので、採る側もこういう専門の人が欲しいとなるのではないですか。たとえば、電気の学科の人が欲しい、それとも機械の学科の人が欲しいと、はっきり企業側も求人票のなかに書いてくるのでしょうか。

立川 それもあるし、会社によっては全部の学科、要するに工業の卒業生であればいいという意識もあるし、むしろ機械科の関係の会社が電気の生徒を欲しいとか、あるいは分析関係をやってもらうために工業化学の生徒が欲しいとか、そういういろんなケースがありますからね。だから、最近はまだあまり何科が欲しいということはないですけども、私がやった頃の70年代というのは、どちらかというと比較的是っきり「何科」と。機械科のことをM科と言いましたけれども、「Mが1名、E（電気）が2名」とか、

「C（工業化学）が何名」とか、そういう感じで来まして、いま千葉工業は情報技術科がありますけれども、「I（情報技術）で何名」とか、そういう感じで来る場合がありますけどね。いまは比較的、「1名」「2名」とか、そういう感じになってる傾向があるようですね。あとは会社で鍛えるというかね。

《工業高校向けの求人職種・専門の転換》

梅崎 昔は、当然技術職も多かったんでしょうけれども、だんだん技能職のほうが増えたとはいえない傾向はあるんですか。

立川 ありますね。

梅崎 決定的に変わったのはいつ頃ですか。たとえば60年代後半から立川さんはお勤めになってるわけですが、決定的に流れが変わったなど、感じられたのは何年頃になりますか。

立川 たとえば、大学の工学部の卒業生がだんだん増えてきて、入ってきたときにいろいろ比較して、工業からの卒業生が四年後にどのぐらいまで上がって、大卒とどれぐらいになったかとか、そういういろんな比較の面もあるから、いつ頃というのはちょっとわからないけどね。いわゆる、高度成長とともに中学から高校に行くときに、成績上位の者が普通高校に行って、普通高校から大学の工学部とかに行く傾向が多くなると、工業はだんだん下がってきますので。

ただ、40人のなかで1割——4名ぐらいはけっこういいのがいますよ。少ないけどね。よく電気とか機械のことに精通した生徒がいますから、そういうところはいまだに技術で採ってくれるとかね。ただ、技術でいくと、ちょっとこの人には会社の要求が高すぎるような場合もありますので、そういうのはわかりますから、「おまえが行くとちょっと大変だな」というケースの場合には、あえて。おとなしすぎる生徒ではね。逆にいえば、対人関係で比較的心配ないなという生徒であれば、少々ハードな仕事にも技術で対応できるかもしれないという、いろんな要素があるから、ちょっと私も限定はできないんですけどね。

梅崎 傾向としては、だんだん技能職が増えてきたということは言えますか。

立川 はい。

梅崎 あと、先ほどおっしゃられたことの確認なんですけれども、企業側も学科ごとに求めていたのが、だんだん工業高校卒ならだれでもいいよと変わったのは、80年代に入ってからと考えてもよいのですか。70年代までは、ちゃんと仕事と学科が連続してたというイメージでよろしいでしょうか。

立川 それでいいと思いますね。80年代になるとけっこう入ってくる生徒も、かなりレベル的に下がってきたんじゃないですかね。中学から工業高校にくる生徒の、高校入試の得点とかそういうのでいうと、かなり下のほうの点数の者が入ってきたとかね。80年代は、そういうのでは言えると思いますね。

《就職後の離職》

梅崎 当時、就職が決まってから、やめちゃうことはなかったんですか。いまは七五三とか言いますよね。

立川 それは、どうなのかなあ。調べるときもあったし調べないときもあったし……。だから……辞めてると思いますよ、なかなか合わないでね。あるいは家庭の事情で、どうしても県外ではいけないとか、いろんな事情がありますから。我々も、そのへんはなかなか。翌年、たとえばその会社が求人に来て、「じつは、これこれこういう事情で辞めてしまった」とか。

極端な話だと、こんな変な例がありましたよ。ある化学関係の会社で、交代勤務で、制御盤を見るいわゆるオペレーターですね。そして、夜友たちから電話がかかってきたと。そうしたら、スイッチを切ってあったことはいいらしいんだけど、その勤務を抜けちゃったと。もちろん解雇ですけれども、そういうケースもあつたりとかね。だから、そういう形で情報は把握しましたけれども、我々からはあえて、離職率はどうだとか、1年目、2年目、3年目で、3年間の合計が5割とかいうのは。じつは今年の、例のこの前いった大阪地区のあれで調べた結果が出ましたけれども、ずいぶん低いことは低いですよ。3年間でも2割。5割はとても行っていないと。近畿地区の場合ですけどね。当然、いることはいますね。

梅崎 でも、工業高校の場合、ある程度将来を決めて高校も選んでいますから、

こんなはずじゃなかったということはないと思うんですけれども。

立川 そうですね。だから、専門高校にはある程度、1年生の入学したときの希望調査をすると、極端にいうと進学のほうが8割ぐらい出てる。70年代はちょっとわかりませんが、私が最後、茂原工業を退職する前なんかだと、だいたい八割が進学希望ですよ。これは親の希望。それがだんだん、本当は大学を希望したけれども、最終的に卒業するときは専門学校になっちゃったとか、そういうケースはあります。先輩の就職状況とか、我々がいろんな情報を流したり、先輩の就職の体験談なんかを聞かせたりして、徐々に職業的な意識が芽生えて、就職に回るケースがありますですね。そういう意味では、いろんなケースがあるので。

さっきの離職なんかの場合、たとえば化学関係の会社でいうと、臭いがあるので。入社試験のときには気が付かなかったけれども、入ってみたら臭いがあって、自分はそういうのは非常に敏感でだめだとか、いろんなケースがありますので。そうしたら、それはもう止むを得なかったというような形ですし、会社の方にもそういうことで辞めたということで、認めたりしてもらっていますけれども。

《求人募集の経路》

梅崎 職安からの求人と、会社が直接訪問してくる求人があるわけですね。職安の場合、中小が多いのでしょうか。

立川 会社は全部、職安で受付をして、判子を押して。職安の受付が、たとえば6月20日……。要するに、それ以前の訪問は、「今年の卒業生は何名です」とか、「機械科は何名です」とか、「今年4月に入社した先輩はいまこういう状況で、研修に入ってます」とか、そういう情報提供であって、そのときにはまだ求人票は職安の判子のないやつで、「こういう形です」といって持って来ますけれども、正式に学校が受け付けるのは、だいたい7月1日以降ですけれども、職安の判子が押してありますから、それを受け付けるということで。それは小・中・大企業、全部それがありますので、職安を経由して求人が来るということですね。

梅崎 立川さんは1976年の段階で進路指導部に専任になられて、進学係を担当

されたのですね。これは、進路指導部には進学係と就職係というのがあるんですか。

立川 大きく分けてありまして、部長は就職専任で、私は78年に副部長ですけれども、副部長は進学全般を担当すると。そういうふうにある程度やって、もちろん会社の人が来た場合には、副部長であろうと会いますけれども。だから、副部長が上において、その下に私が進学の係の1人ということで二年間やって、その後、副部長になったということですけどね。

梅崎 主な仕事は、先ほどおっしゃっていた、企業からの求人票を整理することになるのでしょうか。また、進路指導部副部長として、各クラスに行つて、案内というか、授業というか、そういう情報提供を行なっていくということになるのでしょうか。

立川 そうですね。あるいは私が副部長になってから、進路ニュースというのを週1回ぐらいで出して。昔で言うと、わら半紙の縦長で、いろんな情報を張り付けたりして。その当時はもう、いろんな雑誌からの切り貼りでやったり、それから大きな字で手書きで書いて目を引くように、そういう進路ニュースを。副部長はだいたいそんな仕事をやって、PRには務めましたけどね。いまと昔は、ずいぶん情報の作り方は違うでしょうけれども。

《進学・就職指導時のトラブル》

梅崎 進路指導部長になられるのが、1983年です。

立川 進学のほうでは、たとえばさっき言った東京電機大学の推薦が、急遽取り消されちゃったんですよ。我々はもう、4月が始まったから、当然そういうのが来るだろうということで、ある程度事前に進学希望者で成績に応じて、たとえば千葉工業大学、電機大学、日大生産工学部というところに振り分けるわけですね。ところが、急遽来なくなっちゃったわけですよ。そうして、その生徒はけっこう成績がよかったんですけど、最終的に少しレベルの低い大学の工学部に。そうしたら、親が校長のところに文句を言いに来たんですよ。私が副部長のときだと思いますけれども、私が事前に進学希望の生徒を集めたときに、「いまの時点では昨年と同じこういう大学の推薦が来るかもしれない。場合によっては来ないこともあり得る」と

いうふうに、一応言ってたわけですよ。最終的には生徒が親の前で私のほうを助けてくれたわけですから、実際にそれが起こっちゃいましたね。そうしたら親も納得して、なんとか収まったんですけどね。そういうケースがあったりして、ちょっとそういうトラブルというのはあるし。

それから就職の場合も、これは3学期にだいたい起こるんですけども、就職が決まったけど行くのが嫌になっちゃったと。そうすると、会社も4月以降の予定を立てていますから、そういう場合には進路指導部長が会社のほうにお詫びに行くとかね。校長とか教頭は行かなかったですね。進路指導部長が行ってやると。そういうトラブルはありますね。とくに、4月前に寮に入らなきゃいけないとかいう場合には、もう嫌になっちゃうと。友だちと遊んでたほうが良いという話でね。そういうことで行かなくなっちゃうとかいうことで、親が泣きついてきたりして、どうしてもだめなのは謝りに行くとかですね。そういうトラブルはありましたですね。

それから、いちばん大変なのは、求人票が何百枚も来るわけですから、昔は機械類は発達していませんでしたから、それを全部、3年生のクラスに。求人票を何百枚、全部配るんじゃなくて、たとえば資本金、所在地、就業場所、従業員の数、募集が何人、それから製造するものは何か、そういうものを1行で書いて、それを全部つくるのは手書きだったんですよ。それがとにかく大変な作業ですね。いまではもうパソコンで全部やっちゃっておりますけど、その当時はそういう機械がまだとても進路指導室にはなかったものですから、全部手書きでやって。8月の暑い中、冷房のない中でやるのが、ちょうど私がやってた頃はそういうときでしたね。人の力を借りて手書きでやらなきゃいけなかったとか、そういう苦労がありましたね。景気がいいのは喜ばしい反面、そういう大変な労力があつたことは事実ですね。こういうのを求人票から写すことによって、我々いろんな情報が入ってきますからね。そういう意味では勉強にはなりますがね。この会社はどこにあって、どういう資本金でと。

妹尾 70年代と80年代と、たとえば求人をしてくる会社というのは、変化はありましたか。

立川 このへんはまだないんじゃないですかね。でも、89年のこころへんにな

ると、どうなのかな……。ただ、いまになって、たとえば2007年問題で例の団塊の世代が大量に辞めますけれども、会社によっては5、6年求人をストックしたところは、逆にいえば非常に困ってるわけですね。だから、賢いというか、人事のいろんなことをよく考えてくれる会社は、最悪の場合でも、とにかく最低うちから1名採るとかね。そういう形でやって、いわゆる途切れないようにしてるところがあると。

目の前にある川鉄というのは、残念ながら2、3年、ストップしたときがあるんです。それが非常に向こうはこたえていて、翌年からはずっと採るようになってました。だから、それは後になって、非常にダメージが大きくなるようなことは言われていますよね。ずっと昔からつながりのある、たとえば千葉工業なら千葉工業と完全に縁を切っちゃってストップすると。そうすると今度は、学校のほうもちょっと臍を曲げるじゃないけど、そういうのはあってね。とにかく、1名でもいちばん近いところで、いつも先輩がよくやってる千葉工業なら千葉工業は、どんなに会社が不景気で大変でも、最低でも1名は採ってくれるという、そういう会社が我々としてもいいし。会社も、それが後々プラスになるという言い方はよくしますけどね。

《学科の新設》

梅崎 それから千葉県高等学校教育研究会があります。

立川 これは、いわゆる千葉県の千高教研という組織がありまして、これはいろんな生徒指導、進路指導、それから進学指導などの部会があります。農業、工業、商業、全部入った170～80の学校の加盟している進路指導部会というのを私が担当してまして、これでいろんなのを決めていくわけですけども。これが、この当時は千葉商業に事務局があって、八九年に事務局が千葉工業になって、それ以来、平成元年からずっといままで、いままも千葉工業に事務局があるのかな。

要するに、千葉市内で就職の多い学校ということで、商業はもう長いから、引き受けてくれないかということで私のときに引き受けて、それ以来、いままも続いているようですけども。このなかには専門学校の進学関係も

含まれていると。

あと、関東地域の各県の代表2、3人が関東地区になって、さらにそれで全高進という、全国の進路指導組織があって、そういうなかの関東ということですね。

梅崎 新しい学科の設立は、世の中の変化を敏感に察知したからなんですか。

立川 そうですね。電気科が3クラスだったのが、71年ごろに電気科が1クラス減って、情報技術科ができたんですね。

妹尾 昭和46年度ぐらいですね。

立川 あとは、いま電気科が1クラスになっちゃいましたけれども、機械科が電子機械科になったというのは、ずっとまた後のほうですけどもね。あとは、工業化学は工業化学でそのままあるのかな。情報はもう、これは時代の趨勢でね。情報は情報でまた求人が、けっこう東京あたりが中心の、NEC、富士通だとか、そういう関係とか。あるいは、最近多いのは、私が昔やった頃にはサービスエンジニア的な、メンテナンス関係ですね。オフィスにあるリコーだとかゼロックスだとかのそういう複写機、機械類のメンテナンスをやるサービスマンが、だいたい求人が増える。製造業よりもサービス産業がけっこう多くなったところはありますね。

生徒によっても、そういうのが向く生徒もいるんですね。たとえば、東京電力は昔、子会社——いわゆる関連会社というのをつくらなかつたんですけども、いまはけっこう関連会社を増やしていますけれども。東電に行くにはちょっとこの生徒はという生徒は、関連会社に行くことで、いわゆる東電と少しつながりがあるというかね。そういうことで満足するケースもあります。そういうところは、東電の指揮下に入るわけですけども、それなりに独立した会社ですので、そういうところへもずいぶん行きましたよ。

梅崎 それで、昭和61年のときに学年主任になられますね。学年主任というのは、1学年全体を担当されるのですね。

立川 そうですね。8クラスあれば担任が8人と、プラス学年主任と。昔は、担任のなかから学年主任を。高校の場合は完全にもう、学年主任はクラス

は持たないと。逆にいえば、全体を見られるから、私もここで初めて学年主任はいいものだなという感じでした。進路指導部長もよかったですけれども、上に立つといろんなことが見えてくるというね。そういう意味ではプラスの面があるし。このときはずいぶん、逆にいえば進路指導の経験を活かすことができたですよ。1年、2年、3年と進むに従ってね。こういうときにはこういう情報を流したほうがいいんじゃないかとか、そういうことができたから、けっこうおもしろかったですね。最後の90〇年、91年の電気科の主任というのは、みんな同じ電気科の職員のなかのあれですから、あまり楽しくなかったですけどね。いわゆるここまでが教諭で、あとは48歳からは教頭になったものですから、そのときからはもう完全に、そういう見る仕事はしていなかったものですから。あと60歳までは、教頭を5年、校長を7年で終わったという形ですね。

《保護者の職業と地場産業との関係》

梅崎 ところで、県内を志望する学生は多いんですか。

立川 昔は、この1970年の前半あたりの最初のクラスのときは……いずれにしても県内が多いですよ。いわゆる県内・県外でいえばね。いつも6～7割はいたけどね。ただ、兄弟の数が多かったこともあるんでしょうけどね。たとえば長男であるとかそういうふうになれば、親はなるべく近くにという傾向がありますので、県外には行きたがらないということで、県内が多くなると。県内でも、たとえば佐原とか銚子とかいうところは、また求人が来ても嫌だと。東金には昔、ソニーの会社がありましたけれども、そういうところぐらいまでは十分、生徒は通っていましたからね。

梅崎 通える距離ならいいよということも。

立川 卒業したら車の運転ができるような、車で通えるようなところを希望するとかね。そのためには、会社は駐車場がちゃんと確保してなければ通わせないとかね。こういう会社がありますから、そういう形で選ぶケースもあったんじゃないかと。そういう生徒もいた記憶がちょっとありますよ。

昔、津田沼時代は、それこそ昔の蒸気機関車の時代ですけど、銚子、勝浦、鴨川あたりからも津田沼まで通っていたんですね。その頃の生徒は非

常に優秀な生徒で。ところが最近は、たとえば蘇我ですと、遠くても大網、東金。茂原は茂原工業がありますし。東金、大網からこっちでしょう。それから、成田地区にはちょっと工業がないものですから、成田あたりからは逆に、蘇我の千葉工業まで来るとかね。あと、内房地区はもちろん木更津、君津という。

梅崎 データを見ますと、歴史的に就職先の特徴なんかも出てきますね。

立川 ああ、なるほどね。

妹尾 あと、保護者の職業をある程度表にまとめているんですけども、ちょうど立川先生が最初の担任をして3年間やって、その後のまた担任がありますね。その間で、ちょうどこのへんを境に、保護者の職業として製造業がガンと増えているんですよ。そのへんで、保護者の変化というのは何か感じるものがありましたか。

立川 この当時は、たとえば新日鉄君津が移ってきたのが、もう少し前かな。新日鉄君津製鉄所。あそこらへんで、九州からの親がグッと来てるんですよ。君津の高台に社宅がたくさんありますけれども、新日鉄君津がいつあそこに工場を建てたか。蘇我ですから1本で来られますから、それによって君津、木更津地区からの生徒が俄然多くなった。

私も、担任の2回目だと思いますけれども、成績の良くない生徒ですけれども、「九州大学を受けたい」と。「どうしてだ」って言ったら、自分の従兄弟が鹿児島、鶴丸高校って進学高校があるんですね。「そこから九州大学を受ける。だから、自分は同じ従兄弟どうして、受けるだけ受けたい」と。そういうふうに言われたから、「あ、なんだ。おまえの親は向こうなのか」といって、それで初めて知りました。親が新日鉄君津で、配置転換で九州の八幡のほうからこっちへ来たというのがありますし。あとは、ここらへんは京葉工業地帯のそういう工場がたくさんありますから、そこらへんの配置転換でけっこうあるかもしれないよ。親の職業が製造業が増えているのは、そういうことかもしれませんね。逆に、その減ってるところはなんですかね。1981年。

梅崎 たぶん学校要覧の入力データが間違っているんだと思うんです。

立川 逆に、そこらへんで会社が閉鎖しちゃったとか、それはわからないけど

ね。ここらへんの京葉工業地帯の変遷を調べてみると、そこらへんがわかるかもしれないけどね。新日鉄君津はけっこう新しい施設で、昔はよく…中国の、NHKでテレビでありましたよね。上川隆也というのがやった、山崎豊子の『大地の子』。あれは、新日鉄君津が出てきますから、新日鉄君津が中国で製鉄所をつくるという、その話なんだけど。だから、けっこうあそこは新しい設備で、川鉄なんかに比べたらずいぶん新しいんですよ。だから、けっこう見学者が絶えなかったという。

梅崎 就職先として新日鉄に行くことはあるわけですね。

立川 もちろんあります。けっこう行きたい生徒が、あるいは親がいましたから。あるいは、君津製鉄所と東電がつくった発電所で、君津共同火力ってありますけれども、その発電所に行った生徒がけっこういますから。一時、急に設備をつくったから、従業員が欲しいというケースで、求人が4、5人、パッと来たりする場合がありますからね。

《就職試験》

梅崎 成績がよくても元気じゃないとだめだというのは、普通科高校、もしくは大学でよく言われることですね。成績がよくても、やっぱり性格がおとなしかったりするとうまいかない。ただ、理系だと、それが少し弱まるんじゃないかなと思ったんですけど。

立川 いわゆる会社が希望するケースが多いですからね。だから、我々なんかも見ていてもそうですね。同じ電気科の職員なんかを見ていても、うまく接する人もあるけれども、進学校を出ても……。担任を持たせたり授業をやらせると、問題があったりとかね。そういうケースがあった。だから結局、本当に会社のためになる生徒……それはわかりませんがね。必ずしも勉強ができるだけでは遣い物にならないし、会社もそれは嫌がるからね。

梅崎 それは、1回の面接でわかっちゃうものなんですか。

立川 我々とはとにかく、そのときだけみかけをよくしないとイケないんだけど（笑）、実際は人事の専門家はそれを見破るのがいるとか、新聞なんかで見たことがありますけどね。

梅崎 工業高校の就職試験でも、面接は何回もやるものなんですか。3次

面接ぐらいまでやるものなんですか。

立川 会社が？3次はないでしょうね。極端に言えば1回ですよ。だから、1回、面接と学科をやって、その後、受かったら今度は身体検査、あるいは逆に身体検査も一緒に総合でやっちゃうか、いろんなケースがありますね。だから、ある意味では1回ですよ。けっこう我々も、大学生みたいな社会勉強をしてる生徒と違って、18歳ですから、そんなに遊んでるわけでもないし、本当にある意味ではヒヨコみたいなものですから、あまり変な会社に入れても怖いから、逆にこちら側がある程度、生徒の実態を担任とかにいろいろ聞いて、ここに耐えられるんじゃないかという生徒をだいたい送っていますので。だから、面接も変な仕事をしなくても、だいたいその生徒に合う形で収まるかと思うんですよ。

もっと難しいところを受けさせてくれというのは、たとえば昔でいうと、受ける会社が過去にどんな成績の生徒が入っていたとか、そういうのはこっちのマル秘資料であるわけですね。そういうのを見ながらやって、「ちょっと例年より低いんじゃないか」というと、ある程度他へ移すとかね。似たような会社で違うところに移るとか、そういうケースがありますね。

ただ、去年、普通高校で就職をやったときには、女の子ですから、これまたなかなか難しくてね。千葉商業の生徒と一緒に事務で受けたと。向こうは、専門高校だから資格を持つてるわけですね。これは完全にだめだと言ったら、それが受かったんですよ。そうしたら女の担任の先生が、「あの子、かわいいからね」と。要するに、そういう言い方ですよ。逆にいえば会社にとっては、変な話だけれども、女の子はある意味ではかわいい感じの子を採りたかったんじゃないかと。そんな言い方を女の担任の先生が言ってましたよ。「あの子は美人だから」って。そういうのもあるのかどうか分かりませんがね。男の場合には、そんなにはないでしょうけれども。

あと、事前に我々も知っているから、この会社にはこれがいいなというのがわかってやるから、合格率はいいと思いますけれどもね。大学と違って、自分で開拓しなきゃいけないというのは、ちょっと生徒はできま

せんよね。

妹尾 でも、新しく求人が来た会社に対しては、どういう形で？

立川 新しい求人は、たとえば「当然、うちの会社には来てくれるはずだ」という、そういう高圧的な言い方をするような会社があるんですね。とてもその会社に行きそうもないんだけどね。逆にいえば、熱心に何度も何度も来て、それで製造関係で、こういう会社には我々も人情的に向けてあげると。一方で、新しい会社も、いきなり来てポッとやってポッと出る場合もあるんですよ。それは何のタイミングでしょうかね。昔の古い時代ですから、そんなに不真面目でやってるんじゃないくて、今風の生徒と違いますから、それなりに自分でも考えて、「初めての求人だから、うちの人もよく相談してこい」ということで、コピーみたいなものを渡して、一晩考えてこいという形ではやりますけどね。我々も情報がないと、ちょっと引いちゃいますけどね。それはまあ、生徒と親のあれで。それで新しく実績になるケースもあるかもしれませんしね。だいたい、古いつながりのある、あるいは二年ほど出なかったけれどもまた出るとか、そういうケースで埋まっていくと思いますね。あと、複数の会社がけっこうありますからね。

梅崎 立川先生のように長い経験を持っておられると、昔は大手で、3人採ってくれたのに2人になっちゃったとか、場合によっては求人がとうとう来なくなっちゃったなということもご経験されたと思うんです。全体の流れとしては、ある程度、小さい企業になっていっちゃったと考えてよろしいですか。

立川 逆にいえば、生徒が少なくなったし、そして大手もだんだん求人が減ってきたから、そういう意味ではうまく小企業から中企業まで、昔とあまり変わらない形になってるんじゃないかと思いますけれどもね。ただ、「この生徒では大企業に行ったらかえって潰れちゃう」というような生徒もいますしね。小さい会社でも、それなりにコツコツ真面目におとなしくやっていたら、そのうち報われるんじゃないかという、いわゆる鶏口となるも牛後になるなかれじゃないですけども、そういう生徒の場合もあるかもしれないしね。

それから、たとえば東電とか富士電機とか、そういう電気の会社のなか

で電気を専攻したものが行っても、周りは電気だらけですね。そういうところよりも、むしろ機械の会社、化学の会社のなかで電気を活かしたほうが貴重な存在だろうという、そういうアドバイスもしてますよ。だから、少しでも自分の存在価値があるようなところに行ったほうが、自分もやり甲斐があるんじゃないかという言い方をする場合も。そういう会社から求人が来た場合ですね。たとえば、化学関係から「電気の生徒がぜひ欲しい」と。化学の卒業生は行ってるけれども、電気はあまり行ってないケースでも、ちょっと迷ってるような生徒に対しては、「どうか」というようなね。そういうときに、さっき言ったような言い方をしますけどね。

《進学か就職か》

梅崎 最初、1年生のときは多くの人が進学希望で入ってきて、ある程度、進学を諦めていくというプロセスがあると思います。それは1年生、2年生の段階で、成績等が出てくればなんとなく諦めるのですか。

立川 親も本人も、徐々に、1年、2年、3年といくとね。あとは他の、たとえば普通高校なんかに比べて、進学はしたいと思っていても、だんだん職業意識が芽生えてくる。

変わってきて、最後は就職に希望するという。最近の傾向は、もう完全に大学に入れるような状況になってきている面もあるし、親も「男の子1人だから行かせたい」とかね。そういう感じだし、「いきなり就職では、この子がかわいそうだ」という親もいますから、「2年ほど専門学校に行って、社会的に慣れてきてからやったほうがいいんじゃないか」とか、そういう親もいるでしょうし。

梅崎 でも、いまでも東電さんとかNTTさんに就職している学生がいると思うんですけども、それこそ専門学校に行っちゃうと、大手のところに行けなくなっちゃいますね。

立川 そういうことですね。これも、我々よく言っていましたよ。大学に行っても、たとえば東電の場合ですと、武蔵野のほうに東電学園という、東電のなかでの短大卒、大卒のような勉強をする、各支店から推薦されて入ってくる生徒がけっこういますから、そういうなかでは一応そこを出ると、短

大卒だとか大卒的には扱われるというケースはあります。

梅崎 専門学校に行ってしまうと……

立川 はっきり言えば、100%だめですね。これはもう、言っています。あるいは専門学校でも、自分で探さなきゃいけないと。極端にいうと、悪い専門学校だとぜんぜんやってくれないと。最近は、専門学校もそれをやらないと来ないから、ずいぶん開拓してますけれども。高校みたいにならずいぶん開拓しているみたいですけどね。そのへんは、極端に言えば大学に行っても、東電に入るのは六大学だとか旧帝大だとかね。「それ以外でも、入ってるのか？」ってよく言いますよ。実際にいろんな学校の説明のあれを見ても、それ以外の大学に行っても大きなところに入れないうと。だから、そういう心配はありますね。それは、親と本人に考えてもらう形ですね。

梅崎 東電に行って技能職をやるのか、それとも専門学校や大学へ行って、技能職じゃなくて技術職に行く可能性をとるのか。それは本人が判断するしか。

立川 昔は当然、大手志向が強かったし、いまでもある意味ではね。

梅崎 いまでもそうですね。やっぱり大手のほうが、お給料はいいですから。

立川 入ってから、いろんなあれがいいですからね。ただ最近、大手でもいろんなふうに変わってきてますからね。たとえば、東電は昔はもう、40人いれば5、6人採ってくれた。もっと昔は、これ以前の話は10人ぐらい。いまはもう、茂原工業高校の3年の担任に聞いたら、2人だと。そのうちの1人が落ちたと。私が、「その生徒はおとなしかった？」って言ったら、「そうだ」って。成績はいいんですよ。だから、東電はそれは分かりきっているけれども、本人がどうしても受けたいということであれば、過去の経験から無理だよとは言えませんのでね。一応受けて、少々成績が悪くても元気なのが受かる。それはもう、我々もわかっているんですけどね。2人しか来ないということで。それから、いまはNTTもまったくないですからね。これが、団塊の世代が辞めればまた復活するでしょうけどね。でも、そんなには多くならないですからね。

梅崎 いまだったら、それこそ大卒で技能職というのもあり得るんじゃないですか。

立川 そうです。郵政外務職という、いわゆる外回りですね。そういうのは高校卒業生で採ってくれたんだけど、いまは大卒が全部そこに進出しちゃって、高校卒業生は試験も受けられないとかね。そういうケースがいろいろなところでありますよね。

梅崎 60年代は非常に優秀な子たちが来て、高校で学んだことをそのまま活かすような仕事をされていると思うんですけども、だんだん高校で学んだことと仕事でやることが関係なくなってくるわけですね。せっかくものづくりが好きで工業高校に入学したのに、つまらないなという意見はありませんか。

立川 このへんのときには、あまりなかったんですけども。いちばん新しく、89年のときも、あまりそれは……。はっきりはちょっとわからないですね。

梅崎 でも、それこそ製造業ではなくて、三次産業に就職する人もいるわけですね。それはもう本人は納得して行っているという感じなんでしょうか。

立川 ある程度求人なかで、「製造はどうも嫌だ」と。そういう見方で、「じゃあ、それ以外だとここだ」という、そういう感じですよ。だから、「工場に1日中とか、1年間そういうことで働くのは嫌だ」とかね。あるいは、「交代はどうしても嫌だ」とか、あるいは「給料が高いから、交代でもいい」と。そのへんの、自分のいろんな考えで決めていくんですけどね。そこらへんが、一概にはちょっと言えないんですけどね。ただ、「人と接するのは嫌でない」とか、「この生徒はどうも人と接するのは無理だよ」なんていう形で、「じゃあ、やっぱり製造がいいんじゃないか」とか、そういうような振り分けはしますけどね。

妹尾 希望としては、やっぱり製造業希望の子が多いんですか。

立川 いまはもう人数が少ないですけど、たとえば就職が10人ぐらいいると、製造はそれでもまだ半分ぐらいはいるんじゃないですかね。残りが、いわゆるサービス。サービスも、いまいろんなのがありますけどね。極端にいうと、さっきいった東電の関連会社は、東電サービスだとか東京電設サービスだとか、いわゆるお客さんと接するような仕事であって、発電所のなかでいろんな機械を見ながらずっといるような仕事ではないようなね。だから、サービスも多種多様でありますし。そっちのほうが求人としては多

いんですけれども、生徒がいないという。絶対数がいないから、なかなか応じられないのが現状ではないかと思うんですけどね。

梅崎 確認させてください。進路指導は、3年の4月に希望をとって、4、5、6月あたりで就職か進学かを決める。それで求人票が7月ぐらいい来て、その後、夏休みの間も含めてずっと企業の訪問が続いて、就職が決まる。内定が出始めるのはいつ頃ですか。

立川 いま、解禁が9月16日でしたっけ。それから1週間以内にほとんど就職試験を受けますから、9月23日から月末ぐらいいにだいたい結果が来ますね。

梅崎 短期間で決まってしまうんですね。

立川 内定の通知はね。

梅崎 そうすると、その時点でだいたい何割ぐらいいの子たちが、もう内定もらっているのでしょうか。

立川 景気のいいときには、もうほとんど。1人か2人を残すぐらいいですね。まだ来ないとか、だめだから2回目にチャレンジするとか、そういうケースがいますよね。ですから、今年はまた少し景気がいいようですから、9月末あたりではかなり決まってると思いますけどね。10月の上旬あたりまでにはね。そのときには、会社の誓約書が来ちゃいますから、それですぐ誓約書を会社にとって、内定が決まっちゃうという。

梅崎 でも、この時点で落ちちゃったとしても、何社も受けているわけではない。ある程度、求人票とマッチングさせていると。そうすると、そこで仮に1社落ちてしまったら、すぐに再募集をしないとだめですね。

立川 9月1日から5日ごろの間に、書類を全部、生徒の履歴書から学校の調査書、それから鑑を付けて会社へ発送しまして、それから1週間ぐらいいたつと通知が来て、16日の試験を受けるわけですけども、そのときに明らかに学校から書類が来ないなということになると、「うちには希望がなかったのかな」と。そういう会社は、またすぐに電話がかかってくるんですね。「うちに出なかったようですけども、引き続き随時募集してます」とか、そういう連絡が入ったりね。あるいはもう、最初の7月、8月に会社の方が来たときに、「2次募集をまた随時やりますから」というのがあから、それは一応控えをとって、2次の一覧表をまたつくって、そこか

らまた生徒を、ここ、ここという感じでやると。ところが不景気だと、それがほとんど少なくなっちゃうケースがあるよね。去年行った普通高校なんて、2回目はほとんどゼロ。工業は、まだそれでもあると思いますよ。そのなかからまた生徒は選びだして、2回目また履歴書を書いて、書類を出して、また会社から「いついつ試験をやるから」という形で来るわけですね。いちばん問題は、さっき言った東電で落ちた生徒で、成績がいい、おとなしい生徒、これがいちばん困るわけね。どこを探すかというのがね。

梅崎 難しい問題ですね。

立川 親が進学にといったって、もう推薦はないですからね。とって、一般で試験を受けられるような実力じゃないですから。親も、専門学校に行くにはまた年百万円とか、百何十万円とかかるようなところには、ちょっとすぐに変えるわけにはいかないから、次の会社を探すと。逆にいえば、それがハッピーになる場合もあるかもしれませんがね。そういう小さい会社で、自分の実力を活かせるかもしれないけれども。だから、将来のことはわかりませんがね。そういう形で2回目、3回目。だいたい、3回目でほとんどですね。もちろん、就職する意欲のないのが最近が増えてきていますから、そういうのはもうどんなに勧めてもだめだから、そういうのは手の施しようがない。

梅崎 十月ぐらいで、もう決まっちゃうと。

立川 そうですね。いま私のほうで、10月末現在の就職希望者数、就職内定者数の調査を、全国に流していますけどね。それが、10月末現在でやってくれということだね。

梅崎 お話を伺っていますと、やっぱり普通科に比べると工業科は就職に関しては安定してますね。

立川 それだけ製造関係が多いんでしょうね。それから、メンテナンス関係のサービスでも、少しは工業関係の知識を知ってるほうがいだろうという面もあるし。それから製造関係ですと、工業だから実習とかなんかで機械を扱ってるから、そんなに毛嫌いはいないだろうという、我々もそうだと思うてるし。まったく嫌いなのは、最初から工業は嫌がって辞めちゃうとかね。そういう生徒はいますけどね。そういう生徒は、まったく違う会社

に勤めます。ですから、残った生徒は、工業はまんざら嫌でもないという生徒はいるわけですから、そういう生徒はそういう生徒で、また製造関係はけっこう多いですからね。

梅崎 工業独自の特質はあると思えました。この前、千葉工業高校さんに訪問したとき、歴史のある学校なので、就職も含めて安定してるなと思えました。工業高校のなかでも就職関係がすごくいい高校なんじゃないかななんて、2人で話していたんですけども。

立川 あそこは、古い先輩がいいんですね。ただ、創立は昭和11年ですから、全国的にいったら明治、大正はざらですから。昔は、繊維関係からスタートしてきたから。千葉県は、もう農業からスタートですから、工業で昭和11年なんていうのは全国でもほんのわずかしかないですよ。みんな大正、明治ですから。ただ、場所がまた、あそこに工業地帯があるからね。東京にも比較的出やすいとか、そういう地理的な面でいいんだと思いますけどね。ただ、あそこはちょっと遠いからね。昔の、津田沼にあったときはすぐそばだったから。いまあそこは駅から2キロですから、30分かかって、場所はちょっと不便ですね。ただ、中心校の名前で使ってますからね。

梅崎 定時制もあるんですけども、定時制の場合は？

立川 定時制はまったく別ですね。就職もまったく別だし、生徒のレベルもはっきりいって、ぜんぜん違いますね。昔は働く生徒はけっこういたんですけども、いまはもう昼間は働いていない生徒が来てるとかね。就職も、昼間の求人票が来て、はっきり言えば行かないですから。定時制の先生が「定時制でもいいですか」って聞いたら、「うちは採りません」で、それでお終いなので。逆にいえば、生徒も自分でどこか就職をするとかね。あるいは、アルバイト的だけれども、それをずっと続けて、一生懸命やればまた正社員として認められるとか。

最近の傾向は、九州のほうだったけれども、いわゆるアウトソーシングといえますか、派遣業がすごくこれからはね。それもまた調べようと思っていますけれども、そういうところがあつて。この間、普通高校にいた進路のときもそうですよ。派遣社員で、いろんな会社と契約しているから、どこに行くかはわからないと。一応、求人票ではここだというふうに言っ

ていますけれども、実際に面接にいったら「違うところにも行ってもらう」とか言われて、生徒が嫌になっちゃったりね。そういうケースもありますから。ですが、常勤社員よりもだんだんこれが増えるんじゃないですかね。
 梅崎 それはそれで、すごく雇用が安定してないですから厳しいキャリアだと思えますね。長時間、どうもありがとうございました。

〈謝辞〉

このオーラルヒストリーは、社団法人全国工業高等学校長協会（東京・飯田橋）において2005年10月6日（14時00分～15時40分）に行われた。証言記録の公開にあたっては、読み易さを考えて、まず妹尾、梅崎が編集し、その後、立川氏に文章を確認して頂いた。長時間にわたり貴重なお話をしていただいた立川氏にこの場を借りてお礼を申し上げたい。

この研究は、法政大学大学院エイジング総合研究所の「高齢化に関する国際共同研究（日本、中国、韓国）プロジェクト」（文部科学省私立大学研究高度化推進事業）から助成を受けた。

図1 卒業後進路の推移

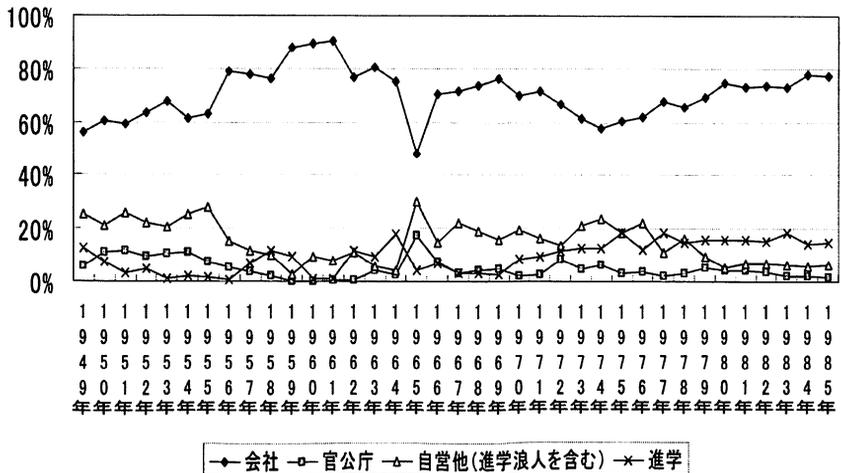


図2 就職先産業の推移／千葉県立千葉工業高等学校（各年度学校要覧より作成）

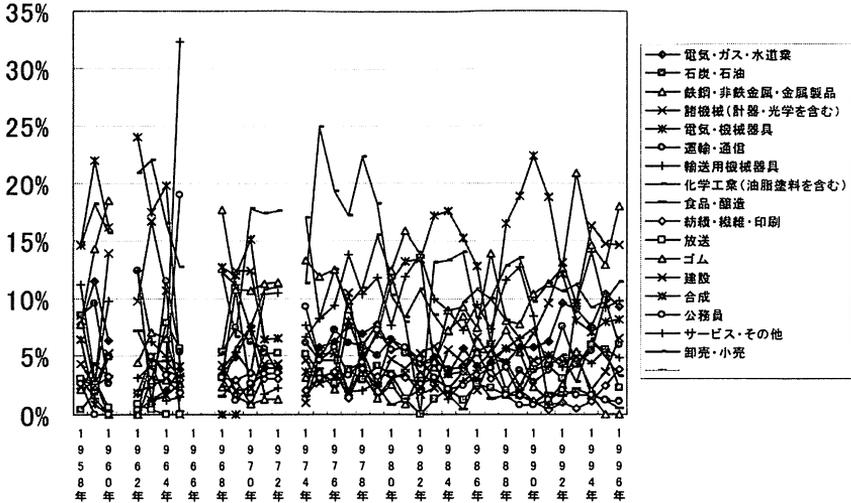


図3 保護者職業の推移／千葉県立千葉工業高等学校（各年度学校要覧より作成）

